
セイレント ～世界の歯車～

蛍火 ほたる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セイレント ～世界の歯車～

【Nコード】

N8097G

【作者名】

蛍火 ほたる

【あらすじ】

これは、今から少しだけあとのお話——起こるかもしれないし、起こらないかも知れない……そんな世界を1人の少年が世界をつくる鍵とされているセイレントを探す物語

第1話 謎の少年

これは、いまより少しだけ後の話。

本当に起こるかもしれない

そして、起こらないかもしれない

そんな、物語

「今回、君たちに集まってもらったのはね、
——この、不法侵入者君を、捕まえるかどうかしてほしいから」
とてもとても大きな部屋で

この中で、一番小柄な、そして14歳くらいの男の子が言った。

そして、侵入者と言われたのは16歳くらいの少年だった……
黒髪に緑色の目、よく言えば中性的悪く言えば女顔の顔つき。

「そのために……我ら幹部を呼び出したのですか？……キング」
「うん。その通りだよ。レイ君」

「……こいつ……からん……？」
「すばるっちの知り合いなのー？……じゃーまだ、カーレント隊長
が来てないけど、君が受け持つってことにしようかな？じゃあ、説
明するね——」

その瞬間、部屋の扉が勢いよく開いた。

「も、申し訳ありません！……カーレント隊長は……その」

18・9歳くらいの女の子が入った

「気にしないでー。たった今、この件についてはすばるっちが受け
ることに決まったから」

「は、はあ」

「ちょ！……キング……まさか」

「これはキングの権限で、受け持ってもらおうよ」

「しょ、職権乱用です！いま私にはキングから受けている任務が」
「大丈夫！レイ君に任せるから」

その瞬間レイ君と呼ばれている男が驚きのあまり

「俺ですか!?!」

「うん。いいよね? レイ君」

「……はい……キングの命令とあらば」

レイ君とやらはため息をついた。どうやら苦労性のようだ。

「え? え?」

さっきから事の起こり理解できていない人がいた

ボタン!!

大きくドアが開いた。

「どうした! 今は緊急会議中だ!」

さっきのことがあったからか少し怒ってますレイ君

「も、申し訳ありません……舞鶴隊長 レベル5です!」

「分かった。現場の状況を言って あ、じゃあちよつとぬけますね」

「うん。その辺にさっきの侵入者君もいるはずだからよろしく」

「げっ」

まじかよーと小声で言ったのは誰も聞こえていなかったようだ。

「……………ここにもいるのか」

さっき、不法侵入者と呼ばれていた少年が立っていた。

「何だ、兄ちゃんは旅の人かい?」

「……………そんなものだ」

「ここは、よくこいつが出てくるといいう土地らしくてな、本当だったらここまで治安もいいはずないんだが…」

「何だ?」

「そこに、大きな建物があるだろう？あれはノーセンテピアという組織でな。」

「――ああやって、あの化け物たちを倒してくれる」

そう言って、おじさんが見たのはバケモノのような大きな体をした、そしてとても人とは思えないものと闘っている、まだ幼さが残る18・9歳くらいの人だった。だが、そこには人間とは思えない力を使っていた。

「ほら、ああやって倒してくれるんじゃないか……ほかの町はこの昼間に外に出るやつは少ないここは……恵まれているんだ」

「ぐあああああ……！」

その瞬間、組織の隊員と思われる人が悲鳴を上げた

「――無理もない。その隊員は……腕をもがれていたのだから……」

「ノ、ノーセンテピアが圧されてるのか………どうしたんだい？
兄ちゃんも逃げないとバケモノに食われてしまうぞ」

「バケモノじゃない」

「え？」

「ま、舞鶴隊長が来たぞ……！各隊員フォローにあたれ……！」
舞鶴隊長と呼ばれていたのは、さっきいたすばるっちと呼ばれていた女だった。

「うーん。こいつのために来たと思うとムカつくなあ」

「は？……今なんと」

「いや、何でもないよ」

「……夏」

そう呟くと、どこからか左頬に刺繍タトゥをした子供が現れた。

——そして次の瞬間、舞鶴隊長はそのバケモノの頭にいた。

そして、その横には、夏と呼ばれた子供も……

「ねー。君ってからんがどこにいるか知ってる？……って、聞こえてないよね」

ドカアアアン！！！！

バケモノは体中の血が噴き出るようにして——いなくなった

「夏。お疲れ」

「うん！お疲れだねすばる！」

「あのね、あそこにね……」

小さな声で、何かをつぶやいた

「うん。わかった！……ありがとー夏探す暇が省けたよ」

「うん」

そう言うと、どこかに行ってしまったのか、姿が見えなくなってしまった。

「さ、さすが舞鶴隊長！！見事でした。」

「ああ、うんありがとね……あ、私ちょっと用があるからここで」

「かーらん。そこにいるんでしょ」

すると、カランと呼ばれた少年

「お前……ここで、何をやっている?！」

「お……久し振りーなのかな……からんだよね」
「こちらの質問に答えてからだ！」

どうやら、知り合いというのは本当のことらしい。

——何かしらの因縁があるということも

「貴様！舞鶴隊長になんという口をきいている！」

「アイナ、こいつ私の知り合いなんだ……それに話したいこともあるから

ここの後片付け、任せていいかな？」

「……舞鶴隊長の、ご命令とあらば」

「うん、頼りにしてるよ。アイナ」

「さあ

私と、話をしようか……からん」

第2話 ノーセンチピア

「ここなら、だれにも邪魔されないでしょ」

伸びをしながら言ってる外見年齢17歳くらいの舞鶴さん

「俺はお前に話すことなど何もない。」

ぶっきらぼうに言うのは外見年齢15歳くらいのからん君

「遠まわしなのは苦手でね、さっさと目的言っちゃいなよ」協力できることならするから」

「ふん。そんなの信じられるか」

「ああ悲しい。いつからこんなひねくれた子になってしまったのかしら。」

「お前の子になどなった覚えはないぞ……切りたいか？」

日本刀を片手に言ってるから怖さ倍増。

「分かった分かった。もう、冗談くらい通じる人間になろうよ」

「お前のは冗談に見えないんだよ」

「からんで遊ぶのはこれくらいにして

————セイレントでしょ」

「……………」

「世界の歯車と呼ばれているセイレント……そっか、なくなっちゃったか」

さして興味なさそうにいう舞鶴さん

「そんな軽いことじゃないだろう」

そろそろ本気で怒ってきたからん君

「まゝ私には関係ないし」

「お前……変わらないな」

「お前じゃない、すばるだよ」

「……………す、ばる」

「なんでそんなに詰まる。言ってみろ」

「別に」

「ま、セイレント探してるなら話は早い……お前、今日からノーセンテピアに入れ」

「……………はあ!？」

「あそこは情報の中心地だから、入らない情報なんてないだろうし………あ!でも、ランク低いと見れないところもあるから、そういう時は言ってみろ——あ、あとさ」

と、たくさん重要なんだか重要じゃないんだか分らん事をたくさん言っているすばる。

というより、ある意味ノーセンテピアという組織を馬鹿にしているのではないか?という疑問も出てくることを言っています。

からんは免疫でもあるのか、話はわかったらしく

「まあ、情報が入るというのなら異論はない」

という風に了承したからん。

「分かってんじゃない。しばらく会わないうちに大人になったね♪」

「……お前……やはり切られたいようだな」

と言いながら、刀を鞘から抜いてるからん。

そういう会話をしながら、ふっとすばるはつぶやいた

「そうだね……里にとっては大変だね。」

——でも、真実はきっと君の思う通りにならないよ」

と、呟くように言っていたことを知っているものはいない。

そして、歩いて約4時間。直線距離25kmほどの道の間を

ノーセンテピアに着きました。

「や、やっとか」

「からんってば相変わらず体力ないね」

「……余計な御世話だ」

もはや言い返す気力もないのか、小さく答えた。

「舞鶴隊長！」

そう呼ぶのは、さっき会議の途中で呼び出していた少女だった。ぱっとみて、15・6歳。きちんと着ている隊服、どうやらまじめな性格らしい

「お、アイリ。後かたづけ御苦労さま……ごめんね、押しつけちゃって」

本当に悪いと思っているのか心配になるような口ぶりだった。

「いいえ、舞鶴隊長のサポートをするのが私の仕事ですから……と
ころで、その…」

と気になっているのはからんのことらしい。

「ああ。こいつ、ここの新隊員だから」

「……………予備知識訓練学校は、卒業しましたか？」

「こいつは行ってないよ……………でも、素質ありだし……………まあ、いざとなったら私の権限で何とかするって」

「ですが、原則では認められません」

と言いつつ、からんの方に視線を向けている。

「……………何だ」

「お前に1つ言っておく。舞鶴隊長に迷惑をかけるな、舞鶴隊長は
会議と戦闘の後でお疲れだ」

「……………お前には関係ないだろう」

「お前には関係なくても、舞鶴隊長の体調などは、私が万全にしなければならぬ。でなければ、だれがお前などに言うか」

「俺はすばるに入れと言われたんだ。疲れようと疲れていなかろう
と、あいつの責任だ」

「舞鶴隊長になんとという口のきき方だ！今すぎ謝罪しろ」

だんだんヒートアップして来ました。どっちも譲らないんで決着も
付きません。

どうやら、相性が……………よくはないらしい。

「と、とりあえず。からんは私と一緒にキングのどこ行こう。アイ
リも、私は大丈夫だから、レベル5の出現のレポート任せたよ」
というすばるの一言で

「分かった」 「了解しました」

まとまった。

「ところで、キングとは誰のことだ」

「いや、誰ってキングはキングだよ」

「日本語になってない。お前それでも日本人か」
もつともだった。

「んー。まあしいて言うならノーセンテピア《ここ》じゃ一番力ある人……かな」

「そうか」

「あ、キングだけじゃないからね。会う人」

「……ほかに誰と会えと」

ちよつと怒ってるからん君。人見知りだからね

「この幹部みんな」

「は？」

「キングの次に偉い人が3人いる。で、その中の2人にあってね♪」
からんがひとみしりと知ってのことだろう。どこかいたずら気な表情だ。

「あと1人はいいのか」

「いいんだよ。だって私だもん」

「……………」

「一応、この幹部だから。『ノーセンテピア幹部及びカンタリオ部隊隊長』」

……要するに、ここで2番目くらいに偉い人か、と頭の中にインプットしたからん。

なんとなく誇らしげなすばるに

「……長い。」

とこれもまたもつともな意見。とりあえず常識はあるらしい。

「確かにね。覚えるのに時間かったもん……さーてそろそろつくな」

「どこに？」

「キングの部屋」

「……まさか、ここか………?」

「うん。ここ」

2人が見ている壁は、全長15mくらいの

――扉だった

第3話 キングと対面

「こんなところにいるのか……?」

「……からん……しゃべっちゃダメだよ。ここは私がなんとかやり過ぎすから」

コンコン

すばるが覚悟を決めたようにドアをノックした

「失礼します。新隊員の件で話があります」

「……」

からんは無言、だったがキングと呼ばれているものにはどうでもよかったらしく

「あ、いらっしゃーい! さっすがすばるっち、まさか隊員にするなんて思いもなかったよ」

と言っているのは、第1話を読んでいたらわかると思うが

……10歳くらいの、男の子だった。

「どうも、キング……今回は」

「うん。承認でしょ?……予備学校行っていないから言われるかもしれないけど

まあいいよ。承認する」

「「……………」」

「あれ？どうしたの2人とも」

あまりの軽さに声も出ないのか、固まっている2人

「じゃあ部隊配属もカンタリオでいいよね」

「あれ。いいんですか？戦力の均一は」

「あー……………すばるっちは知らないんだっけ

さっきのレベル5の襲撃で、カンタリオが2人死んじやったらしいから」

残念そうに言うキング。むしろ涙目になっている気がしないでもない

「今度から強化が必要だよね！だからさっきから強化の提案書みた
いなにつく言ってるんだ、誰も……………死なないように」

「誰も死なせないで、守るなんて不可能だ」

「ちよっ……………からん！」

「死んでもいいから入ったんだろ？そういう風に言うのは失礼だと思わないのか？」

仕組みなんて分かってないのに強気というからん君

「でもさ、死んじゃうと戦力の均一があるから面倒だし、

……考えるのオレだし、めんどくさいし…何かオレが悪いみたいになって文句言われるし」

さっきの態度はどこへやら……どうやらめんどくさかったからだけらしい

というかここからものすごく続きます。あれだね、以下エンドレス

「戦力の均一？」

「部隊格差がないように、どの部隊でも戦力は同じにするんだよ。

それがこの流儀^{おきて}」

へーと言っているからん君。わかってんのかね

ふっと、部屋の奥に、小さな子供がいるのに気がついた。

にっこりと笑っているとても可愛らしい子供

ここまでなら、だれでも納得できる……だが

———その子供は、透けていた

「!?!?」

驚きまくってるからん君。まあ透けてるんだから当たり前だよな

「?どうしたの。からんそんなに驚いて」

「あ、あそこ……!!」

そう言って指差した。

「あ！春、透けてる透けてる」

『……あ。ほんとです。』

すると、透けていない普通の子供？に戻った。

まあ、透けてないのは普通だけれども

「な、何だ！何だあれ！」

「お、落ち着けからん。あれは――」

「春！やっぱ不思議でしょ！ここに入るんだってさ」

『よかったねキング』

「あれは、春って言って……キングの能力を具現化したやつ」

「能力？」

「からも見たんでしょ？あの……人間業とは思えないあの超能力
みたいなの」

「……まあな」

「あ、また見る？」

「止めておく」

そんなこんなで、キングとのご対面は終了

そして、次に行くところは

「次は幹部と顔合わせだね……ていうかからん！しゃべるなって

いったのにしゃべったじゃん！」

「そういえばそんなこと言っていたな…」

「まあいいけど……」

じゃあ始めは……強敵レイ君から行くか」

第3話 キングと対面（後書き）

作「いやゝここまでの道のりは長かったね」

か「まだ3話しかやってないだろ」

作「そうかもね……レイ君のキャラはちょっと変わってる？ 的な感じです！ 次の話をお楽しみに」

か「勝手に終わらせるんじゃない！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8097g/>

セイレント ～世界の歯車～

2010年11月19日08時19分発行